

昭和十四年

(三十二)

合掌 御心配かけてすみませんでした。住吉で歯痛（聖光）よんで下さい、書いてあります）をおこして五日間皆様に大変御厄介をかけ、折角待つて頂いていたのにお話も聞かせないで相すまぬことでした。

魔事がおおるとどんなにもがいても駄目であることを痛切に知らされました。ですから聞かれる日にだけ、許された日にだけ、未来のことは考えずに聞かせて頂くこととあります。

然しそう言つて待つてはられないのが人の心です、はからつてみて其の上のこととあります。はからつて聞かれるみ法ではないけれども。

大法を讃嘆することの上手な人、それが一番尊い人であります、上手と言つては言葉が悪いけれども、大島のお母さんのように。男の出来ないことをします。女でも丈夫と言われる意味がよくわかります。

明るい心、明るい顔、念仏の口、大法の讃嘆、大空を鳥がまうように、今日一日念仏の中に笑つて下さい。

機の深信を説きたまうは、泣かせんが為ではなくて、業障を切つて法喜を得させんが為であります。故に仏を大安慰と申すのであります。こゝまで出されたことを喜ばずして明日の聞法のことを言つて暗い顔をするのではない、念仏して今日を謝し聞かされたことをよろこんで生きてゆくのです。又道が開いて来ましょう。恵まれねば念仏して待つのです、今日大法に会つていつゝ、それを喜ばずにその次を気にするのは貪欲であります。念仏は今日を安住し、貪欲は望を描いて明日を期待する。今日を念仏に明るく安住する御工夫あつてしかるべしであります。ではこれで失礼します。三十一日九時四十四分で河内通過します。中務君によりしく言つて下さい。

昭和十四年五月二十八日 福山にて

夜晃

中務みつよ様

(三十四)

合掌 南無阿弥陀仏

五月十五日より十九日迄、住吉の大島さんのところで歯痛の為に氷嚢をつけて寝ていた時です。絹家から手紙を回送して来た中に、校長の家内宛のはがきを入れていました。自分あてのものを何故に送つたのであろう、と思いつゝ読まして頂きました。読んでいる中に校長先生のおが眼の中に浮かんできます。「夢ほど正しいものはない」これは校長の純なる思慕の心、念仏の心がそのまゝ現れた夢であります。勤行していられる様子が思われる、歯の痛いのも忘れて念仏しました。そうしてこのはがき

が校長のかわりになつて御見舞いに来て下さつたように頂戴しました。校長の夢の中には、五時間も続けて立った日の私の疲れた相が出ています。念仏申させてくれる便り、これ以上の御見舞いが何処にあらう。有難うありました。み心のほど頂戴致しました。

奥さんの明るいお念仏のお顔が見えて声が聞こえます。何でも言いたいほどのことが皆言える嬉しさ。春枝さんを手もとにおきたいは山々でしょう、それはよくわかつていますが、もつともつと育てたい、もつと太らせたい、前原さんが家からこの春四月には帰れと言う、やつとその姉婿の有本先生に言つてもらつて九月までと云うことになり、しかもこの六月皆が一番嬉しい月に家事の手伝い、六月の例会（それは五月があまり有難かつたから）にだけおかして下さい、せめて四日までと頼めば三日の午後帰れとのこと、御祖母の意が主となつているのですが、前原とみは泣いております。高いところから親の愛を誰かが御らんになればどうでしょう。姉が十九や二十で結婚したから、この娘もと云う意見なのです。真に愛するとは、考えずにはいられない。一家の平和？を思つて両親さえ老母によう言わないのだそうです。春枝さんは恵まれている、嬉しいことであります。奥さんよくしてくれました。

お念仏のみの尊いことがいよいよ明らかに知られます。いずれの地に行つても。念仏の素顔で接する大島の老母のような人は接する人を動かします。念仏申しましょう。念仏を通して一切を受け取る人、念仏を通して一切を出す人にならして頂きましょう。

念仏に諸善万行を混雑するのが教育家であります。諸善は念仏に統一されるのであつて、同一レベルに混入するものではありません。念仏して我が胸を凝視し沈潜しましょう。我が身によいことがあるように思われている時は大変な時であります。念仏より外に大善はありません。教育家はとかく如来随他の小善に因われて、至上絶対の大善に立つことを忘れます。

いよいよ本部に帰る日が近づいて来ました。本部の者の喜びの程が思われます。六月は本部の者と共にいよいよ念仏道に静かに精進させて頂きます。いずれの地でも女塾の子たちの家族から泣いて喜んで頂いております。有難いことであります。

人には様々なそれこそ八万四千の生活対象がある。然るに「超世無上」の（大経には超という文字が非常に多い）彼岸に大信によつて一如につながっていたゞき、最深の世界に一切を超えた第一義諦妙境界を生活対象とする、そこに正定聚の人の生活がある。永遠の彼方をにらんで生きる人が日本国土の中になればなりません。幸に健在に御精進下さい。

昭和十四年五月二十九日 福山中井内

夜晃

佐々木清一郎様 同小春様

(三十五)

合掌 南無阿弥陀仏

度々お便り有難く存じ奉り候。此の度は御病氣なされ候て御難儀あそばし候。痛む病は我が身にひきくらべてさこそと推察いたし候。はじめ中耳炎とのこと、その後様子を聞くのが恐ろしくさえ思ひおり候処、手術はせぬとのことにて先ずほつと致しおり候。まりちゃんと二人で心配しつゝも毎夜一時頃に就寝、全く暇なくて失礼致し候。小林さんが例会に來られて見えたので最近の様子は知れたものゝ、二十六日頃よりの様子知れず如何なされ候やと案じおり候処、ご書面下され様子相わかり嬉しく存じ奉り候。病名不明なりしよし、小生も或いは首のこりではないかとも思ひおり候。神経痛等ならば鍼灸療法等がよくはなきやと存ぜられ候。当分は十分御遊びなされたく、体大切になされて念仏相續なされたく候。六日七日にわたるあの有り難かりし本部の講座を、明覚よりお聴きなされたく候。体の悪きは一番の損に御座候。くれぐれもお大事になされて一日も早くご全快に至られ候様切に念じ致しおり候。まり枝様先日私の書齋にて、生まれてはじめての幸に會わして頂きました。一ヶ月間も続いて御法を聞かして頂きました、と泣いていました。若の手紙も見せ候ところ、泣いて読んで念仏致しおり候。よき子にて候。聞かざれし日は懺悔合掌念仏申されたく候。先ずはお見舞いまで、時々御様子御知らせ下されたく候。大西屋皆様によろしく、御帰山の節は母上にも。

八月講習の講題は「二河白道」と決定仕り候、左様御取り計らい下されたく候。先ずは要々のみ。

昭和十四年七月六日

夜晃 3

大森忍 様

久遠劫來の因縁なくしては輪廻も大信も御座なく、現在の一念に久遠劫來の因縁を悲しみ喜ぶところに念仏の生活は御座候。

(三十六)

合掌 南無阿弥陀仏……(略)……

御法を聞く人は多いが真に聞く人がありません。説こうとする人はあつても聞こうとする人も少ない。聞く人はありますがよろこぶ人が少ない。大慶喜心を得て口常に念仏し口常に讚嘆する人が少ないようであります。幾年も幾年も聞いてくれてまことに御浄土からそのまゝにお念仏する人がまれであります。二十願の世界から出るといふことは至難なことであります。遭い難き大法に遭わして頂きつゝ真に遭うていないことは悲しいことであります。

今日一日真に念仏申させて頂きました。人の手元ばかり見ていると自分の手元がぬけることあります。み親のみ胸に一貫させて頂きました。

昭和十四年九月二十八日

夜晃

中務御二人へ

(三十七)

合掌 南無阿弥陀仏 朝に夕にそして何時も念じ続けている本部から、誰一人として様子を知らせてくれる人のない旅先に、よくも様子を知らせてくれました。弟の部屋からお念仏がもれ、そして皆が大法の讃嘆をしている様が有難くしにばれます。本部は私の心臓です。本部に念仏あるは、全光明団、否全法界の念仏の健全なる相です。女は情意によって動き易い。法喜樂と利己的感情の満足を混同し易い。己が機の真相を大法によつてつきとめて、礼に生き懺悔合掌して念仏に生き、今日一日を洋々たる大信海に生きたまえかし。丹後先生、佐々木春枝さんの病氣憂慮しています。一切を放つて専心養生せよとお伝え下さい。下岡には誰も不参。第三日母上参詣せられた。

昭和十四年十月二十日

下岡静子様

島根県那賀郡大麻村染香寺内 住岡夜晃

(三十八)

合掌 南無阿弥陀仏

御便り確かに拝見致しました。母丈もよくないとの知らせをまりちゃんからの御便りで承知して心配しています。それに家では奥さんが気管支援助とのこと、まことまこと何とも云えないことである。ご心痛のほど推察して胸の痛くなるのをおぼえる。然し念仏申せ。念仏してこの業苦の一切を受け取らして頂くこと、冬が来たのだ。人の一生には必ずこうした苦難の日があるものだ。満目荒涼たる雪の曠野のような日があるものだ。誰に訴えようもない日があるものだ。その日が今、若の上に来たのだ。

「念仏者は無碍の一道なり。」言えるか！叫ばれるか。味わえるか。

「君はまだ若い、念仏者は無碍の一道なり。それは妻子を持たない日に言うことだ。」あの誰かの言葉にかぶとをぬぐか。有碍なればこそ、お念仏の中に、如何に寒く冷たくとも大信海の洋々たるを呼吸するか。心静かに念じつゝけたまう大悲を憶念して、業苦の中に合掌し、師教の言々区々を体解して、一切を受け取り、何事が現れようとするがまゝを念仏の中に受け取つて唯一すじの白道を歩みたまえかし。然れば、順境の日に名利愛欲の道草を喰い、真の念仏の道味を知らざる日より、苦しき今日の日が、まさっているであろう。必ず嘆くなかれ。金剛の真心に乗托して、念仏申させたまえかし。

さりながら風邪気のよし。心配の至り、よく気をつけて、寝不足しないよう、胃腸を痛めぬよう、無理をせぬように、若が、この上寝るようなことがあると大変だから気をつけてくれ、寒い日に外に出る時には、玉葱を切つて、生のまま三分の一位食べて出ると少々の風邪はなおるし、体に元気がつき、胃腸がよくなる。

奥さんに気をつけて、医師の命ずるままに十分養生させること。

どうか背後に御身を念じつづけるものあることを、念じて、力強く、しかも、足もとに気をつけ、人生の真相を味わして頂くこと。

○ 吹雪たつ広野をゆきて忍終不悔と誓いし於やのこゝろ身にしむ

○ 越路なる雪の旅路に愚禿とぞ名告りたまいし祖師のしのぼゆ

念仏に徹しきりたまへ。体をいとえよ。

昭和十四年十二月二十八日夜 有井にて

大森忍様

夜晃